

みなさん、こんにちは！

緊急事態宣言が解除された地域もあり、収束に向かいつつあるようで、すこし気持ちが明るくなりますね。

『徒然草』に「高名の木登り」(第109段)というお話があります。

木登りの名人が弟子の仕事を見守っていたとき、弟子が高いところにいるときは何も言わず、もう少しで地面だということ所で、「あやまちすな 心して降りよ」と言った、というお話です。

「高いところ、つまり危険な状態の時は自分で用心するけれど、もう大丈夫、と気を緩めた時に失敗するものだ」という教訓です。「油断大敵」ということですね。

どうかみなさんも気を緩めず、引き続き気を付けて生活してください。

では、今週の課題です。

高校1年生

【国語総合】

新精選古典文法準拠ノート(問題集) P2~7まで。丸つけまでしましょう。

※新精選古典文法(文法書)の対応ページが書いてあるので、確認しながら問題を解きましょう。

★先生たち おすすめの短編

「青空文庫」で読める短編を紹介します。ぜひ読んでみて！



梶井基次郎『檸檬』

レモン…外国産のものは一年中売られていますが、国産のレモンは今が旬ですね。国産のレモンならあまり防腐剤や農薬の心配をせずに輪切りにして飲み物に添えることができますね。この時期ならではのたのしみのひとつ。ギュッと絞ったレモン果汁にはちみつを混ぜて、炭酸で割って、レモンスカッシュ。私の家族の好物の一つです。高村光太郎は智恵子抄で「がりりと噛んだレモン」をトピアズ色の香気と描きました。米津玄師さんは忘れられない人の思い出と一緒に胸にわきあがるレモンの苦い匂いを歌っています。(←たぶんそういうことだよ)あの色、香り、そして強烈な酸味の中の甘み…私たちそれぞれにレモンには思い描く特徴があると思うのです。さわやかさ、爽快さ、青春、恋、切なさ…人がレモンに関して想像するところはこんなイメージでしょうか。さて、今回紹介する梶井基次郎の檸檬。主人公は檸檬の形と重さに惹かれたのです。なぜ形と重さかって…？この小説の主人公がレモンに持ったイマジネーション、それはユーモア！ものは考えようです。どんなに窮屈な時代だって、生活だって、ユーモアの持ち方一つで、笑える世界に転じることができそうです。早く生徒のみんなと教室でくだらないことで笑いあいたいな~たくさんネタを作って来てくださいね！レモンネタ、待ってるよ！あ、この小説の感想もね。笑




菊池 寛 『形』

中学校の教科書にも掲載されている作品です。読んだことのある人もいるかもしれません。何か新しいことを始めるときに、かっこいい道具や着るものなどを用意して「形から入るタイプだから！」なんて言う人いますよね？この作品のテーマは、題名の通り「形」。筆者が「形」を通して伝えたいことは何か。自分の身の回りにある「形」、何があるでしょうか。この機会に改めて考えてみてください！

『形』 https://www.aozora.gr.jp/cards/000083/files/4306_19830.html



江戸川乱歩 『日記帳』

江戸川乱歩は推理作家ですが、『日記帳』は弟の日記を読んだ「私」が、暗号に込められた弟の思いを読み解いていくお話。事件の推理ではなく、暗号の謎解き…そして恋 
誰かに恋心を伝える手段は、時代とともに変化しています。
平安時代は和歌が何より重要なツールでした。
私が学生だったころは、ラブレター。(下駄箱に入れたりして…?)
ポケベルが出た当初は数字の暗号で、メッセージを送っていました。(知ってる?)
たとえば084は「おはよー」、49「至急」、39「サンキュー」、4649…などなど。
その後ポケベルはカタカナ対応になって、プッシュホンで11と打つと「ア」、12は「イ」、21は「カ」…という感じ。「アイタイ」と伝えるのに「11124112」と打つ。(『日記帳』にでてくる暗号はこれに近い！)
当時の松蔭でも、休み時間ごとに電話ボックスに行列ができました。
携帯電話が普及して、いつでもどこでも手軽に連絡をとれるようになってからは、急速に変化しました。
メール、絵文字、ライン、スタンプ…。
でも、どんなかたちであれ、伝えたい想いは同じです。
今、世界中のいろんな人がメッセージを発信しています。
温かい言葉、力強い言葉…たくさんの言葉がこの苦境を乗り越える力となっています。
言葉ってすごい！とあらためて実感する日々です。
電話するといつも最後に「先生も気をつけてくださいね」と言ってくれて、ありがとう。
もうすこし、みんなでがんばろうね。



19 16 18 9 14 7 23 9 12 12 4 5 6 9 14 9 20 5 12 25 3 15 13 5 .

『日記帳』 https://www.aozora.gr.jp/cards/001779/files/57190_58247.html



夏目漱石 『吾輩は猫である』

「吾輩は猫である。名前はまだない」吾輩は猫であるの冒頭の文です。この文から猫の物語はスタートしていきます。主人公である「吾輩」は猫であり、名前がありません。名前がないことは、人間の世界で考えると、あやふやな者として存在していることを連想させます。そんな「吾輩」という独特な一人称の猫。この物語は猫の視点で見た人間生活の様子が描かれます。主人公である「吾輩」は生まれてすぐに人間に捨てられました。生きるために仕方がなく苦沙弥（くしゃみ）家に住み着きました。初めは、人間を軽視し、馬鹿にしていた「吾輩」ですが、徐々に人間たちを認め、尊敬するに値する存在と認めるようになります。そして最後は人間に憧れをいただき、人間のように生活をしたいとまで考えるようになるのです。少し長い文章ですが、名作と呼ばれるだけあって引き込まれます。

アニメーションや、ラジオドラマもあります。それぞれ少しずつ物語が変わっている部分もあるので、ぜひ探してみてください。ねこっていいよね🐱

ラジオドラマ <https://www.youtube.com/watch?v=wyJHzQFD7j8>

朗読 <https://www.youtube.com/watch?v=C342-Uj5nQ0&t=631s>

